



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「をこがまし」の系譜：『夜の寢覚』の帝試論
Author(s)	高橋, 雅恵
Citation	国語国文研究, 103, 10-27
Issue Date	1996-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94839
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_103_10-27.pdf



「をこがまし」の系譜

『夜の寢覚』の帝試論

高 橋 雅 恵

一

『夜の寢覚』のいわゆる〈帝闖入〉事件は、次のような帝の心境で閉じられる。

…とばかり見送らせたまひて、「などて、をこがまし」。かかる逢瀬は難くこそあらめ。あながちに心苦しきを見知りつるぞや」と、悔しく、いみじくおぼさるるに、人目苦しからずは、やがてたちつづきぬばかりの御心地ぞせさせたまふ。

(『校本夜の寢覚』三三〇頁)⁽¹⁾

永井和子氏は〈帝闖入〉について、「ことは成就しなかったが、帝物語の真骨頂は、およそこのあたりにあろう」と述べた。この点については異存はないが、今この場面で注意したいのは「をこがまし

く」という表現である。寢覚の上を我が物にし得なかったという帝の行為が、当の帝自身によって「をこがまし」と意識されている点をここで見過ごしてはならないだろう。というのは、この物語においては、このような「をこがまし」という感情が他の人物にはほとんど見られないからである。

念のため用例数を挙げておくと、『夜の寢覚』の「をこがまし」の用例は全部で十六例を数えるが、そのうち一例は打消推量であり、残る十五例を見ると、そのうち八例までが帝に関して用いられていることが分かる。「寢覚の御仲らひ」を形作る男主人公については二例しかないのをはじめ、入道太政大臣について用いられているものが二例、但馬守に対する草子地の評が一例、偽生霊事件に対する男主人公の評として用いられているのが二例⁽⁴⁾となっている。このことだけを見ても帝に対するこの語の用例の集中は明らかだが、さらに、『夜の寢覚』には一例しかない「をこがまし」という語もまた、他ならぬ帝に関して用いられているのである。以上のことから、

この物語における「をこがまし」という感情は、帝という人物に特徴的に付与された心的傾向であるといつてよいだろう。

ところで、この「をこがまし」という言葉に表れている意識と、笑いを引き起こすものとしての「をこ」とを即座に結びつけることができないのは言うまでもない。石川徹氏の整理に拠れば、「をこ」とは「人の笑ひをさそふ滑稽な失敗を演じたりする阿呆」であり、それに対し「をこがまし」とは、「いい道化者」「いい物笑ひ」になるような「不格好」「不体裁」「チグハグサ」を見つともない恥づかしいとする、さうした気持の言葉である。換言すれば、自分あるいは他人の感情や行動を、第三者が見たなら「をこ」のようだと思うであろうと考えることが、「をこがまし」という意識なのである。また、石川氏は「をこがまし」の訳語について、「対他的に使はれる場合と自分自身についていふ場合」とで異なることを指摘したが、これに即していえば、前に述べた寢覺の帝に関する八例の「をこがまし」のうち、実に七例までが「自分自身についていふ場合」に該当するのだ。

本稿で問題としたのは、まさにこのような対自的な「をこがまし」という意識に他ならない。そして、このような「をこがまし」という心的傾向を持つ者として表現されている男君達を、我々は『源氏物語』に見ることができるのである。彼らがそれぞれ抱える「をこがまし」という意識を追ってゆくと、彼ら一人一人の固有の心的傾向があざやかに浮かび上がってくる。それは彼らの恋のありようと無縁ではない。言い換えれば、「をこがまし」という表現を辿ってゆくことで、彼らの恋の性質の違いとも言うべきものが明らかに

なっていく、そのような側面があるということなのだ。そして、『夜の寢覺』の帝もまた、『源氏物語』の男君達に見られる「をこがまし」の系譜に連なる者として表現されているのである。

二

まずは、寢覺の帝の「をこがまし」という意識の内実を、本文に沿って確認することから始めたい。対象としては、帝が自分自身について評した七例の「をこがまし」に加え、「をこがまし」一例をも含めて検討してゆく。

①とばかり見送らせたまひて、「な^①どて、をこがまし^②く。かかる逢瀬は難くこそあらめ。あながちに心苦しきを見知りつるぞや」と、悔しく、いみじくおぼさるるに、人目苦しからずは、やがてたちつづきぬばかりの御心地ぞさせたまふ。〔既出部分〕

（巻三、三三〇）

②「さても、あさましう、心強かりつる人の心かな。さばかり思ふにては、後の逢瀬、よにあらせじものを。などしつるをこがましきぞ」とおぼすがいみじく妬きに、恋しさ、とりもあへず、「かくのみおぼえは、いかでながらへやるべきにか」と、涙にうきてあかさせたまひつ。

（巻三、三三二）

③御文を（寢覺ノ上ガ）ひき開けたれば、尽きすべうもあらぬことを書き続けさせたまひて、

（帝ノ文）「見やしつる見ずやありつる春の夜の夢とて何を人に

語らん

をこがまし。我かしこにおぼしいづらんをさへ思ひやるに、いと消えぬべし」

など書き乱させたまひつる、

(巻三、三三五)

①③は、基本的には、寢覚の上に「単衣の関」を残すのみというところまで迫つていながら、なまじないたわり心を起こして諦めてしまった帝自身の間抜けぶりを指している。女が男の接近から逃れる場合の場面状況から比較してみると、例えば「源氏物語」夕霧巻では「障子をおさへたまへるは、いともはかなき固めなれど」(四・三九四)と表現され、また総角巻でも「この御障子の固めばかりいと強きも、まことにもの清く推しはかりきこゆる人もはべらじ」(五・二五五)といわれている。「障子の固め」がほとんど意味のないようなものであるというのだから、まして「単衣」の「関」など、普通ではありえないのは明らかだ。しかもこれが至尊の身分である帝の行為であることを考えると、まさに空前の「をこがまし」だと評せよう。

このように、帝の「をこがまし」を引き起こす原因は、自らの思いを遂げられなかったことそのものにあるが、時間の経過につれて、①と②ではその意識は異なっているのがわかる。つまり、①は寢覚の上を逃がしてしまったことに対する思いだが、②では「後の逢瀬、よにあらせしものを」と気付き、それなのに望みをかけていたのは冷静に考えれば愚かなことであつたという後悔が生じているのである。

このあと帝は、策が成功しなかったことを大皇の宮に語る。

④「すべて、おもふき」※意味不明⁽⁸⁾強く侍りける人を。ことわりとは言ひながら、いとはしたなくもてなし侍りつるに、我が身の程知られてこそ帰りにしか。内の大皇の方の心の、いみじく深きにこそ侍りけれ。いかでか、さは、なげの言葉にも情け添へぬやうのあらん。見る目、もてなしの、さばかりなまめき、あえかなるほどよりは、いともはしたなく心強きほどにぞ侍りける。さはれ、をこがましきこと。世の聞こえも軽々しく、女房のなかにも散らし侍らじ」と、(大皇ノ宮二)きこえさせたまふを、

(巻三、三三九)

ここでは、故関白未亡人に執着し言い寄つたあげく何ごともなかったばかりか、彼女のつれなさと同時に、「我が身の程知られてこそ……」とあるように、彼女にとっては自分など物の数にも入らないことを思い知る結果に終わったことを指す。「さはれ」とあるから、寢覚の上についての述懐を聞いている大皇の宮が、自分(＝帝)を愚か者と見ているのだと思ひ、話を打ち切ろうとする働きもあるだろう。また、「世の聞こえも軽々しく」とあるのは、帝たるものの振る舞いとしてふさわしくないことを一方で自覚していることの表れであるといえる。それは、臣下の娘かつ未亡人に熱をあげ、宮中とはいえ自ら女のもとへ出向いてまで言い寄つたということであり、その上拒絶されたことを指しているよう。

巻四に入つてもこのような状況は変わらない。

⑤上には、あさましう、思ひ知る一行の返事だになくてやみにしより、「かばかりの心にては、さりととも頼みをかけ、後の逢瀬をこがましかりけりかし」と、いみじう悔しう、妬う思しめされて、

(巻四、三六八)

これも②と同様、そうはいっても自分の心の深さをわかつてもらえらるだろう、そうすれば後の逢瀬もあらう、と期待していたのは全く浅はかであつたということを指している。そして①の「悔しさ」と②の「妬さ」とが再燃し、⑥の手紙へつながるのである。

⑥(帝ノ文)「さりととも必ず思し知りなむ、とおぼえしもてなしを、我たけう、をこがましく思し離れ、一行の御返りもなくのみあるは、あさましう、後瀬の山の頼みもあるまじかめるを。何の人目か。ただ心にまかせて乱れたる人の上なりとも、すこし世の常にてこそ思ふべきわざなりけれ。昨日今日のようにもののおぼえば、いみじく思すさまに隙間なく定まり果てたまひぬとも、さてはあべうもあらず。きこえしやうに、ところせき位なども、ひたぶるに捨てむとなむ思ふ。」

(巻四、三七二―三七三)

「私の思いやり故の行動を、あなたは理解するどころか馬鹿なことだと思ひになつてかけ離れ、お返事すら下さらないのですね」と、寢覚の上の気持ちに付度して訴える帝の言葉は、あなたもきつとこのような私を馬鹿な男と思っているのでしよう、という気持ちの表

れである。そして⑤の「いみじう悔しう、妬」き無念の思いが、「きこえしやうに」とあるような、〈闖入〉の折りに口にした譲位の望みへとつながるのである。

次の場面は、中宮から帝へ向けられた「をこがまし」を含む点で重要である。

⑦(帝)中宮ニ寢覚ノ上ヘノ思イヲ語ル」と語らひきこえたまへば、(中宮ハ)「さればよ」と、をかしう思されて、「登花殿に、自づから参る折もあらむを、督の君に語らはせたまへかし」ときこえたまへば、「今は、よに参らじ。(中略)限りなくめざましかりける人よ」とて、「宮の御覧するところもをこがまし」と、つまつめたまへど、うちこぼさせたまへるを、(中宮ハ)「いと、いとほし」と見たてまつらせたまひて、「さて、いかに侍りけるにか」ときこえさせたまへば、「すべて、言ひ尽くすべくもあらぬ人なりけり。ただ、あたりもにほひ満ち、玉光り輝くなどは、かかるを言ふなりけりとぞ見えし。ただ人なれど、めでたしや、内の大臣は。かかる女にいみじく思ひ靡かされたるよ」とのたまはする御ものうらやみの童げたるを、(中宮ハ)「(A)をこがましく見たてまつらせたまふ。」

(巻四、四〇九―四一〇)

物思いのつる様子でありながら中宮にも何も話さなかつた帝が、ついに寢覚の上への思いを打ち明ける場面である。中宮は、思った通り、と合点して「さればよ」と、をかしう「思い、余裕のある態

度を見せている。帝は中宮の目を意識して「をこがまし」と思いつつも涙をこらえきれないのだが、中宮はやはり「いと、いとほし」と帝への思いやりを見せている。ここまでは両者の関係は良好だが、中宮に促されると、帝は真正直に女君の素晴らしさを滔々と語ってしまう。中宮の側では、それまで抱いていた「をかし」「いとほし」といった帝に対する余裕や思いやりの感情が、ふと気付くと帝のそのような子供じみた物言いによつて(A)のばかばかしさへと転じてしまっている。「をこがまし」という思いは、第三者の目には「をこがまし」と映るであろうという意識であることを考えると、中宮が抱いている「をこがまし」という思いは、帝の様子のみならず、わざわざ他の女をほめる話を聞かされた自分も馬鹿を見たという、一種自身自身に返ってくる意識であると考えられる。一方、帝は中宮に「をこがまし」と見られることを恐れ自制しようとしていながら、結局は寢覚の上を手放しでほめたたえて中宮に「をこがまし」という思いを抱かせてしまう。その意味で、帝の「をこがまし」という第三者への意識は、自己批判に結びつくことのない、はなはだ中途半端なものであると言わざるを得ない。

最後の例を見よう。

⑧ 一行の返事をだに御覽せさせず、まだ知らずあさましよう妬き人、と思しめす方は方にて、「あらば逢ふ世もや」となぐさめさせたまふべきに、誰も千歳の松ならねば、限りと聞き閉ぢめさせたまはむ御心惑ひは我もまさりて、いみじく思しめされぬべきも、「をこがましき心かな」と、かへすがへす思し取りながら、「大

臣の添ひ居て思ひ騒ぐなるも、いかが見るべき」とは思しめしなから、「そは、などてか。あらはれてこの人に添ひてありしに、一言もかけそめたらばこそ、便なからめ、少々は知らず顔にて」と思しめして、督の君の御文の中にて、例の、白き紙に言葉多くもあらず、「いと、かかれば」とばかり書かせたまひたるを、

(卷五、五三一—五三二)

波線部に見られるように、帝の思考の屈折の様がありありと辿られる文章である。(闕入)以来、帝はただひたすら「後の逢瀬をこがましかりけりかし」と痛感してきたはずであった。寢覚の上に「あはれ」と思ってもらえないばかりか、一行の返事すら届かないにも関わらず、それでもなお、妬き憎らしさはそれとして、生きていれば逢うこともあろうかと望みを捨てきれず彼女に執着している。しかもそのような自分の心が、他人から見れば馬鹿げたものであると「かへすがへす」思っている。しかしその自覚も「思し取りながら」とは思しめしなから」という、反復される逆接の文脈の中で流れていつてしまう。帝の思いは「少々は知らず顔にて」という自己正当化へと行き着き、相も変わらず寢覚の上へ手紙を送り続けるのである。

以上のように、帝の「をこがまし」という思いは直接には寢覚の上を手にかかることができなかったということを指しているが、そこには、あろうはずのない再度の逢瀬に望みをかけていたことや、「世の聞こえ」を憚る意識などが関わっていたのである。そしてこのような「をこがまし」という第三者への意識が浮上しているながら、次の瞬間にはその思いはもう逆接の文脈の中に埋没し、「をこがまし」

き自分の状況に対する批判は保留されたまま、元の思いへと戻っていつてしまう様相を見出せる。帝に関する「をこがまし」という表現から、以上のような帝の心的傾向が確認されるのである。

三

さて、寝覚の帝は『源氏物語』の男君達に見られる「をこがまし」の系譜に連なる人物である、と前に述べたが、一体それはどのような点においてなのか。

この問題を検証する前に、用例数の検討をしておこう。『源氏物語』における「をこがまし」の用例は四十一例（「をこがましかり」三例を除く）だが、作中人物の対自的な「をこがまし」の用例を見てみると、男が自らの恋の状況を、あるいはその自分のありようを評する場合が圧倒的多数を占めている。その内訳は、光源氏の六例に始まり、柏木の二例、夕霧の五例であり、そして薫に至っては実に十二例の多きを数える。

このことから、『源氏物語』の主要な男君は皆、「をこがまし」という思いを抱え持つ者として表現されているのだ、と言えそうだが、事はそう単純ではない。なぜなら、これも既に述べたことだが、彼らそれぞれの「をこがまし」という意識からは、彼らの恋の状況を実に端的に窺い知ることができるからである。以下、順を追ってその内実を明らかにしてゆくこととしたい。

(1) 光源氏

光源氏の「をこがまし」の用例分布は、空蟬巻二例、夕顔巻二例、紅葉賀巻一例、行幸巻一例となっており、いわゆる『源氏物語』第一部、しかもその前半部分に集中しているのが特徴である。

①とばかりそら寝して、灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。いかにぞ、をこがましきこともこそ、と思すに、いとつつましけれど、導くままに母屋の几帳の帷子引き上げて：（空蟬、一・一九八）

②いぎたなきさまなどぞ、あやしく変はりて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく、心やましけれど、人違へとたどりて見えんもをこがましく、あやしと思ふべし。本意の人を尋ね寄らむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなう、をこにこそ思はめ、と思す。（空蟬、一・一九九）

③御心のうちに思し出づることもさまざまなり。ものまめやかなる大人をかく思ふも、げにをこがましく、うしろめたきわざなりや。げにこれぞなのめならぬかたはなばかりけると、(B)馬頭の諷め思し出でて、いとほしきに（夕顔、一・二一九）

④命をかけて、何の契りにかかる目を見ららむ。わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心のむくい、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。ありありて、をこがましき名をとるべきかなと思しめぐらす。

(夕顔、一・二四四)

⑤帯は、中將のなりけり。わが御直衣よりは色深し、と見たまふに、端袖もなかりけり。あやしの事どもや、下り立ちて乱るる人は、むべをこがましきことは多からむと、(C)いと御心をさめられたまふ。

(紅葉賀、一・四一六)

⑥この「音無の滝」こそうたていとほしく、南の上の御推しはかり事になひて、軽々しかるべき御名なれ。かの大臣、何ごとにつけても際々しう、(中略)けざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもやなど、(D)思しかへさふ。

(行幸、三・二八二)

①③は空蟬、④は夕顔、⑤は源典侍、⑥は玉鬘をめぐる状況の中での自分の行動を、客観的に見つめる思考であり、注目すべきは、「む」「べし」「もこそ」などといった仮定・推量を示す語と共に「をこがまし」という思いが見られるのが、光源氏の大きな特徴だという点である。

①は空蟬の寝所へ忍んでいく場面だが、このとき既に彼は「をこがましきこともこそ」と、これから起こる事への危惧を抱いている。②では様々に思いをめぐらせたあげく、最も「をこがまし」くないような行動を選択したわけだ。そして後日談の③では、「ものまめやかなる大人」に対してこのような思いを抱くのは、「をこがまし」ことだと感じている。「大人」というからには、当の自分は「大人」ではないのだという自覚が含まれていよう。その中で光源氏は、「げに」という言葉を繰り返しつつ、かの「馬頭の諫め」、いわゆる「雨

夜の品定め」での左馬頭の発言を思い出す(B)のであった。

こうして空蟬への思いが静まっていく一方で、物語は彼と夕顔の女との恋を語り始める。しかし、それも女の死という異常な事態に終わり、彼は④のようにまたしても「をこがましき名を取るべき」自分を予想するのである。それは、「かかる筋におほけなくあるまじき心のむくい」と規定されており、このような軽々しい恋は自分にはふさわしくなかったのだ、という後悔が込められているのである。

⑤は、源典侍のもとで頭中將に驚かされ、大立ち回りをしてしまったあとのことだが、この源典侍をめぐる一連の話の持つ「をこがまし」としての側面、あるいは「すき者」の求婚譚との関わりについては既にさまざまに論じられており、⑤もそのような「をこがまし」の状況の中にあるといえる。光源氏自身、この体験を「あやしの事」と捉え、「下りたちて乱るる人」は、このようなみづみづもないことが多いことだろうと考える。これは、自分もそのような振る舞いをしてしまったという自覚であり、このようなことは二度とすまいという(C)の反省につながっている。

⑥は三十歳を過ぎてから唯一の「をこがまし」の例である。養女として引き取った、かの夕顔の遺児・玉鬘への恋心を抱く光源氏は、彼女を妻にするといった場合に実父の大臣(II)かつての頭中將)から受けるであろう「けざやかなる御もてなし」を想像し、(D)のように思いとどまるのであった。

以上のことから考えると、光源氏の「をこがまし」という意識は、今「をこがまし」かなりつつある自分、あるいはこのまま行けば将来必ずそうなってしまうであろう、自らの「をこがまし」き状況に

対して向けられているといえる。光源氏は「雨夜の品定め」で男達の語った「中の品」の女性との恋愛体験へ、それをなぞるように引き込まれていった。そのような恋は結局自分には似つかわしくないのであり、それゆえに自分は「をこがまし」き状況に陥りつつあるのだ、と彼は考える。そしてそう考えることによって、波線部(B・C)・(D)のような反省が導き出されるのである。自分の行動が、身分違いの、品劣る女との色恋沙汰として世間から非難されることが予想された時、彼の心には「をこがまし」という意識が生じ、その思いが反省と結びついて、彼の気ままな恋が抑えられて行く過程は明らかだ。それは①⑤に見られるように、光源氏の若き日の恋特有の感情であったという事が出来よう。⑥のような、玉鬘への恋心にしても同様である。彼女は夕顔の女の忘れ形見であり、光源氏にとっては若き日の夕顔との恋を思い起こさせた、十代の恋の残像そのものであったのだ。そして、養女へ懸想する男という構図への意識からも「をこがまし」は導き出されている。つまり、光源氏においては、社会的な規範に反するような状況に対して「をこがまし」という思いが浮かび上がってくるのである。

(2) 柏木

柏木の対自的な「をこがまし」は、わずかに二例と少ないが、彼の恋の様相を考える上ではやはり検討しておく必要がある。まず次の例を見てみたい。

①「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづ方に

つけても、あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありけると、いよいよ恨めしきも添ひはべるかな。…」(藤袴、三・三三二)

①は玉鬘が異母妹だと知った後の、彼女に対する発言である。それだけに彼女を意識し、やや自嘲しているポーズのように解される。彼女に対してはもう一人、夕霧が「をこがまし」という思いを発している。後に詳述するが、夕霧もまた玉鬘に思いを寄せる一人であった。それと知らず実姉に恋情を抱く柏木と、実の姉だと思いこんで恋情を抑えていた夕霧。玉鬘が実は光源氏の養女であることが明らかにされた時、彼らの置かれた状況は逆転し、奇妙に滑稽な印象を読者に与える。当事者には悲劇だが、無関係な第三者にとっては喜劇と呼び得る状況であり、彼ら二人の発する「をこがまし」という言葉はこのような状況を的確に表現しているのである。ここでは「をこがまし」という言葉が、一対の鏡のように柏木と夕霧それぞれの立場を映し出しているといえる。玉鬘をめぐるは光源氏も、既に⑥で見たように「をこがましうもや」という危惧を抱いており、これは玉鬘物語の特質の一つと言えそうである。

再び柏木に目を移そう。

②「これ(「猫トイウモノ」は、さるわきまへ心もさをさはべらぬものなれど、その中にも心賢きは、おのづから魂はべらむかし」など聞こえて、「まさるどもさぶらふめるを、これ(「女三宮ノ猫」はしばし賜はりあづからむ」と申したまふ。心の中に、あながちにをこがまし、かつはおぼゆ。

(若菜下、四・一五〇)

この前の場面には、

「かのありし猫をだに得てしがな。思ふこと語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつけむ」と思ふに、もの狂ほしく、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。

(若菜下、四・一四七)

と語られていた。柏木は女三宮への執着ゆえに、猫を手に入れたいと「もの狂ほし」い程に望み、それを実現させてしまふ。だが、そのような自分の行動は「あながちにをこがまし」いことなのだとい応は捉えられているものの、直後に「かつはおぼゆ」とあるように、その自己相対化の思いは彼の心の片隅にふと起こるだけなのであった。それ以上の思考の深まりはなく、反省や自制に結びつくこともない。その結果「をこがまし」くも、女三宮への禁忌の恋にのめり込んでいってしまうのである。光源氏の発する「をこがまし」が、反省と自制を呼び起こすものであったのとは対照的であると言える。

(3)夕霧

夕霧の五例の「をこがまし」のうち、第一の例は、先に述べた通り、玉鬘をめぐる求婚譚の一つとして位置づけられるものであった。

①(夕霧、玉鬘二訴エル)「……まめやかには、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心の中を、いかでか知ろしめさるべき。なかなか思し疎まんがわびしきに、いみじく簞めはべるを、今はた同じと思ひたまへわびてなむ。頭の中將の気色は御覧じ知りきや。人の上に、なんと思ひはべりけん。身にてこそいとをこがまし、かつは思ひたまへ知られけれ。…」

(藤袴、三・三二四)

玉鬘が実は姉ではなかったと知り、恋情を訴える夕霧の置かれている状況はそのまゝ、柏木の状況の裏返しであると言える。「いとかたじけなき筋」というのは、玉鬘は内侍督として出仕する事が決まっているため夕霧の思いが無駄であるという自覚を示すものである。このような事態になって初めて、馬鹿げたことだと思われるだろうが柏木の気持ちがかつたという訴えには、多分に聞き手を意識し自嘲するポーズが含まれている。

①以外の四例は、すべて夕霧巻に見られる。

まめ人の名をとりてさかしがりましたまふ大将、この一条宮(＝落葉ノ宮)の御ありさまをなほあらまほしと心にとどめて

(四・三八三)

と語り始められるこの巻が、「まめ人」の恋をめぐる悲喜劇であることは周知の事実であろう。その中で夕霧はどのように「をこがまし」という思いを抱いているのか。このことを確認することは、ひいて

は夕霧物語の性格を明らかにする手がかりとなるう。

②(夕霧、落葉ノ宮ニ対シテ)「あさましや、事あり顔に分けはべらん朝露の思はむところよ。なほさらば思ししれよ。かうをこがましきさまを見えたてまつりて、かしこうすかしやりつと思し離れむこそ、その際は、心もおさめあふまじう、知らぬ事々けしからぬ心づかひもならひはじむべう思ひたまへらるれ」

(夕霧、四・三九八)

③年ごろ人に違へる心ばせ人になりて、さまざまに情を見えたてまつるなごりなく、うちたゆめ、すぎずききやうなるがいとほしう心恥づかしげなれば、おろかならず思ひ返しつ、(E)かうあながちに従ひきこえても、後をこがましくやと、さまざまに思ひ乱れつつ出でたまふ。

(夕霧、四・四〇〇)

④御座の奥のすこし上がりたる所を、試みにひき上げたまへれば、これにさし挟みたまへるなりけりと、うれしうもをこがましうもおぼゆるに、うち笑みて見たまふに

(夕霧、四・四一八)

⑤「かれも、いとわが心をたてて強うものものしき人のけはひには見えたまはねど、(F)もしなほ本意ならぬことにて尼になども思ひなりましたまひなば、をこがましうもあべいかな」と思ふに：

(夕霧、四・四五九)

まず④だが、これは雲井の雁との関わりを考える必要があるが、手紙一つに振り回され一喜一憂する自分を指している。残る②③⑤の例は、女二宮(落葉の宮)に對しなかなか行動を起こせない自

分への感情で、落葉の宮に恋情を打ち明け接近しながら、結局彼女を手にすることはできないのではないか、そうならば自分の姿は、さぞ「をこがまし」いことだろうと彼は考えているのである。

夕霧の「をこがまし」という思いは光源氏の場合とは異なり、身分意識に結びつくものではなく、(E)・(F)のように、落葉の宮に避けられ振り回される自分についての思いであるといえる。このように「をこがまし」の指す対象は異なるが、夕霧も「後をこがましくや」「をこがましうもあべいかな」と、今後「をこがまし」い状況に陥って行きそうな自分を想定している。この点では一見光源氏と同じように見えるが、しかし、光源氏の場合は自らの行動の「をこがまし」さを抑制する方向に働いていたのに対し、夕霧の場合は行動を起こさないことを「をこがまし」と感じているのであって、その「をこがまし」さを回避するためには実際に行動を起こし落葉の宮を妻にするしかないことになるのである。

さらに、次の場面に注目したい。

(補)かうのみ痴れがましうて、出で入らむもあやしければ、今日はとまりて、心のどかにおはす。かくさへひたぶるなるを、あさまし、と宮は思いて、いよいよとき御気色のまさるを、(夕霧ハ)をこがましき御心かなと、かつはつらきもののはれなり。

(夕霧、四・四六五)

(補)として挙げたこの場面では、夕霧は自らを「痴れがまし」と思ふ一方で、落葉の宮の「いよいよとき御気色のまさる」のを見

て「をこがまし」と非難する心さえも生じている。落葉の宮本人は、夕霧のあまりに強引な振る舞いを「あさまし」と心中で非難しているのだから、それを窺い知ることなく非難する夕霧の感情は、実に滑稽で的外れなものであらう。ここに至つては落葉の宮への窓が不毛なものとなつてしまつていたのであり、「をこがまし」さを回避しようとした夕霧は、彼の意図とは逆に「をこ」なる状況に陥つていたのである。

以上のように、「をこがまし」きの回避という点では同じように見えても、「をこがまし」の由来も回避の方法も光源氏と夕霧とは全く異なり、夕霧の「をこがまし」は反省や自制に結びつくものではない。さらに夕霧は「をこがまし」を解消しようとした結果、逆に「をこ」なる姿を露呈している。つまり、彼の「をこがまし」という意識は、結果として彼の「をこ」なるありやうを浮き彫りにしているといえよう。

(4) 薫

既に確認したように、『源氏物語』において対自的な「をこがまし」の用例が最も多いのは薫であり、その事実だけを見ても、「をこがまし」が薫の重要な心的傾向の特徴であつて、欠くべからざる要素であることが想像されよう。その内実はいかなるものなのか。

①こももとに几帳をそへ立てたる、あな口惜し、と思ひてひき帰るをりしも、風の簾をいたう吹き上ぐべかめれば、「あらはにもこそあれ。その几帳押し出でてこそ」と言ふ人あなり。をこが

ましきもののうれしうて、見たまへば (権本、五・二〇八)

意外にも、八の宮の姫君たちの姿を見ることができるとも思はない、と薫は思ったが、几帳が邪魔で見えず、残念に思つていたところへ、偶然風が吹いて几帳がずらされることになった。これで姫君たちを見ることができると一喜一憂する自分の姿は、他人から見ればみつともなからう、と思う意識が働く。だがその次の瞬間、「ものの」という逆接の文脈によつて、「うれしうて」という気持ちに没入してしまい、垣間見するのであつた。

②かくほどもなき物の隔てばかりを障りどころにて、おぼつかなく思ひつつすぐす心おそさの、あまりをこがましくもあるかな、と思ひつづけらるれど、つれなくて、おほかたの世の中の事ども、あはれにもをかしくも、さまざま聞きどころ多く語らひきこえたまふ。(総角、五・二三)

自分と大君との間には「ほどもなき物の隔て」しかないにも関わらず、薫は行動を起こせない。彼はそのような自分の悠長さを「をこがまし」と「思ひつづけ」ながらも、何気ない様子であれこれと話をするだけである。①と同様、②の「をこがまし」という思ひは、「思ひつづけらるれど、つれなくて」という逆接の文脈によつてひたすら薫の心中で反芻されるだけで、実際の行動に結びついてゆかない。そして後日彼が意を決して大君へ接近したとき、大君は薫から逃れ、次の③を引き起こす。

③弁はあなたに参りて、あさましかりける（大君ノ）御心強さを聞きあらはして、いとあまり深く、人憎かりけることと、（薫ヲ）いとほしく思ひほれるなり。（薫、弁ノ君ニ対シ）「来し方のつらさはなほ残りある心地して、よろづに思ひ慰めつるを、（G）今宵なむまことに恥づかしく、身も投げつべき心地する。（中略）宮（ハ）句宮」などの恥づかしげなく聞こえたまふめるを、同じくは心高くと思ふ方ぞことにものしたまふらんと心えはてつれば、いとことわりに（H）恥づかしくて、また、参りて人々に見えたとまつらむこともねたくなむ。よし、かくをこがましき身の上、また、人にだに漏らしたまふな」と怨じおきて、例よりも急ぎ出でたまひぬ。

（総角、五・二四六）

薫は弁の君に對し、大君に避けられた自分を愚か者と思うであろうと、先回りして自嘲している。それは、女に逃げられたという、（G）の「恥づかし」さによ來するのであつた。結局このあとも薫は大君と結ばれぬまま、彼女の死によつて薫の望みは決定的に絶たれてしまふのである。

この後、薫の思ひは残された大君の「ゆかり」である中の君へと向かう。しかし彼女は既に句宮のものとなつていた。それは言うまでもなく、他ならぬ薫自身の手引きによるものであつた。

④「わがあまり異様なるぞや。さるべき契りやありけむ（中略）思へば、悔しくもありけるかな。いづれもわがものにて見たてまつらむに、咎むべき人もなしかし」と、とり返すものならねど、

をこがましく心ひとつに思ひ亂れたまふ。

（総角、五・二九三）

⑤（句宮ガ中ノ君ヲ）いみじう御心に入りてもてなしたまふなるを聞きたまふにも、かつはうれしきものから、さすがに、わが心ながらをこがましく、胸うちつぶれて、「ものにもがなや」と、かへすがへす独りごたれて

（早蕨、五・三五五）

⑥「心から、悲しきことも、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたに安からず思ひはべるこそいとあいなけれ。…」

（宿木、五・三八四）

薫は④で初めて、自分がなにもしなかつたために大君・中の君の二人とも失つてしまつたことを「悔しく」思うのだが、やはり、言つても取り返しつかないことをいつまでも思い悩むだけなのである。それが自分の招いた事態であるだけに、今更後悔するのは「をこがまし」「いことだというのであるが、その「をこがまし」という思い自体はそれ以上追求されることのないまま、「心ひとつに思ひ亂れたまふ」として叙述は締めくくられてしまふ。

そして⑤も、できることなら取り返したいという後悔であり、中の君を句宮に渡してしまつたのは自分の心の招來したことであるのもわかつていて、なおかつそれが馬鹿げたことであつたと考えている。「かつはうれしきものから」という文脈によつて、中の君の後見として当然あるべき「うれし」という思ひはそれとして、依然、中の君が自分のものであつたならという思ひが生じてしまふ薫の心的傾向が、端的に示されている。

⑥では「悲しきこと」すなわち大君と結ばれぬまま彼女がこの世を去ってしまったことと、「をこがましき悔しきもの思ひ」、すなわち中の君を他の男のものにしてしまったことが並立するものとして意識されている。この「をこがまし」もまた、中の君を手にし得なかった愚かさを意味し、④と同様に「悔し」と共に浮かび上がるという点で④⑤の延長線上にあるといえる。④・⑤・⑥は結局、③で「をこがまし」と意識されていた薫の大君に対する「心おそさ」が、中の君に対しても働いていたことに由来するのである。

⑦見とがむる人やあらんとわづらはしきも、女の御ためのいとはしきぞかし。「悩ましげに聞きわたる御心地はことわりなりけり。いと恥づかしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しきおぼえてやみぬるかな。例のをこがましの心や」と思へど、

(宿木、五・四一八)

⑦では、中の君に接近しながらも結局は何事もなく出ていく薫に對して、「わづらはしきも、女の御ためのいとはしきぞかし」として、語り手側から薫の気持ちを代弁する地の文が付されている。薫自身の心内語によれば、中の君が身重であることがその原因だったというのだが、「多くは」それが原因だ、としており、それ以外にも「やみぬる」理由がある事が窺える。その理由こそが、女性に接近しつつも手にすることができない「例のをこがましの心」なのである。「例の」という語によって、それがすでに薫の女性に対するパターンとなつてしまつてゐることも示されている。しかしこの心内語に先

立つ弁解によつて、そのような薫の姿を理想的なものとして定位しようとする、物語の意図が感じられる。そうすることで、夕霧の物語の様に喜劇めいた話になつてしまふ事を回避しているのだといえよう。

「ものにもがなや」と「かへすがへす」後悔していた⑤薫が、中の君に對し行動を起こしたのであつたが、やはり思いを遂げられぬままに終わる。とすればこの一件もまた、再び薫の後悔の中へからめ取られていくことは想像に難くない。

⑧中納言の君は、かく、宮の箒りおはするを聞くにも、(I)心やましきおぼゆれど、「わりなしや。これはわが心のをこがましきあしきぞかし。うしろやすく、と思ひそめてしあたりのことを、かくは思ふべしや」と、(J)強ひてぞ思ひ返して、さば言へどえ思し棄てざめりかし、と(K)うれしくもあり。

(宿木、五・四二七)

薫は「心やまし」(I)と思う一方で、既に他の男のものとなつた中の君に執着する「わが心」を「をこがましきあしき」心とみなし、自制しようとしている。しかしその自制は「強ひてぞ思ひ返し」(J)でこそ出てきたものであつて、自ずと生じたものではない。その結果、そのような自らの「をこがましき」を意識していながら、「さば言へど」という逆接によつて、「うれしくもあり」(K)というもう一方の「うれしさ」が浮上してくる。このように、逆接によつて辿られる波線部(I)↓(J)↓(K)の屈折する思考の中で、「をこがまし」とい

う思ひは次第に見失われてゆく。その意味では薫の「をこがまし」という思ひはやはり反省・自制とは結びついていないのである。

このような後悔の中、大君・中の君の異母妹である浮舟が登場する。薫は大君に似ているという浮舟を密かに迎え取るべく行動を起こすのであるが、次の⑨・⑩のように突然の申し出に警戒されぬよう気を配り、かつ中の君に対しても軽々しく見られぬよう意識して振る舞っている。

⑨「さらば、その客人に、かかる心の願ひ年経ぬるを、うちつけになど浅う思ひなすまじうのたまはせ知らせたまひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひうひしうならひにてはべる身は、何ごともをこがましきまでなん」と、(中ノ君二)語らひきこえおきて出でたまひぬるに、
(東屋、六・四八)

⑩(薫、弁ノ君二対シ)「明後日ばかり車奉らん。その旅の所、尋ねおきたまへ。ゆめ、をこがましうひがわがすまじくを」と、
ほほ笑みてのたまへば、
(東屋、六・八〇)

⑩で「ひがわが」というのは、薫自身何度も自覚し、またこのすぐ後に「人のもの言ひ」とうたであるものなれば」とも意識されているように、身分の低い女である浮舟に関わり合うことの愚かしさを言う。しかし大君の身代わりを得たいという「心の願ひ」が「年経ぬる」ことは事実であり、薫は浮舟を大君の「形代」として隠し据えようとする。「人のもの言ひ」を気にしながらも「形代」を求めずにはられない薫は、周囲に対して自らを「をこがまし」と卑下

してみせることで、予想される「人のもの言ひ」を先回りし回避しようとしているのである。

⑪ 荻の葉に露ふきむすぶ秋風もゆふべぞわきて身にはしみける

と〔女一宮へ贈ル絵二〕書きても添へまほしく思せど、さやうなるつゆばかりの気色にても漏りたらば、いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ。かくよろづに何やかやと、ものを思ひのはては、「昔の人」〔大君ものしたまはまし〕かば、いかにもいかにも外ざまに心を分けてましや。時の帝の御むすめを賜ふとも、えたてまつらざらまし。また、さ思ふ人ありと聞こしめしなからは、かかる事もなからましを、なほ心憂く、わが心乱りたまひける橋姫かな」と思ひあまりては、また〔宮の上〕〔中ノ君〕にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をこがましきまで悔しき。これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人〔浮舟〕の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さすがにいみじと、ものを思ひ入りけんほど、わが気色例ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけんありさまを聞きたまひしも、思ひ出でられつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむ、と思ひしには、いとらうたかりし人を、思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわがありさまの世づかめ怠りぞなど、ながめ入りたまふ時々多かり。(蜻蛉、六・二四九～二五〇)

⑫「我も、また、はじめよりありしさまの事聞こえそめざりしかば。聞きて後もなほをこがましき心地して、人にすべて漏らさぬを、なかなかほかには聞こゆることもあらむかし、現の人々の中に忍ぶることだに、隠れある世の中かは」など思ひ入りて

(手習、六・三五三)

残る二例のうち、まず⑫は、浮舟失踪後一年が過ぎて一周忌の法要も行った後で浮舟が実は生きていると聞いた後の、いささか肩すかしをくったような薫の心境である。

問題は⑪の方なのだが、女一宮・女二宮から大君・中の君、そして浮舟へと思いが移ってゆき、薫の恋に関わる女性全てが語られているという点で、この場面における薫の思考は彼自身の人生を総括するものだといえる。女二宮という妻がありながら女一宮への思慕を持て余す薫だが、あれこれと思いをめぐらせた末、薫の思考は今亡き大君へ向かう。

二重傍線の「ましかば：まし」の反実仮想の連続によって、薫はこのような現状に至った原因を大君の死に求めようとする。その、大君の死という思考は、必然的に大君の「ゆかり」である中の君への思いを呼び起こすのである。中の君をめぐる薫の思考は「恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をこがましきまで悔しき」として総括されており、ここに至ってもまだ薫は「をこがまし」という思いの中に留まっているのである。

「をこがましきまで悔しき」という薫の後悔は、それがもはや取り返しのつかぬことであることを、一方では自覚しているからこそその

意識なのであろう。しかし、薫の「をこがまし」という思いも後悔も、波線部の心内語に見られるように、「ただわがありさまの世づかぬ怠り」に全ての原因があるのだ、という自己規定に取り込まれてゆく。女の側には何の責任もない、世間一般の男女の仲とは違う自分のありようゆえなのだ、という思考は一見非常に思いやりあるもののようだが、これまでも薫はそのような自分を「をこがまし」と意識しているがそれらを放置してきたという事実を考えれば、これは自己のありようを容認した開き直りに近いものである。

ここで光源氏の例を思い起こしたい。薫の、第三者に対する自嘲のポーズとしての例⑨・⑩は光源氏的といえなくもない。が、前に見たように、光源氏を感じていた「をこがまし」という思いは、いわば若き日の品劣る女との恋にまつわるものであったが、彼はその「をこがまし」さを我が身に引き受けつつ、一つ一つ事態を収束させていった。一方、薫の場合はといえば、大君への思いも中の君への思いも、彼にとつては身分や立場、現世利益を超えた一人の男としての真剣な感情であつたはずだ。にも関わらず、彼は「をこがまし」という思いを繰り返し抱き、かつそれに対する判断を保留したまま、後悔の念にさいなまれ続けるのである。この点で、薫の「をこがまし」という意識の内実は明らかに光源氏のそれとは異なっている。

また、薫の例①は柏木(例②)や夕霧(例④)に見られたような、ある種のみつともなさを示しており、かつ女に対してなかなか行動を起こせないことから「をこがまし」という意識が生じるという点では、夕霧の例②・③・⑤を受け継いでいるといえそうだ。しかし、両者を截然と分かつのは、「をこがまし」き状況を良くも悪くも回避

しようとする行動力が夕霧にはあるが、薫には無いということであり、また薫の例⑦の場面に見られたような、相手の女へ対する配慮という一種の理想性を付与する評言が、夕霧に対しては無いということである。つまり、薫の「をこがまし」という思いは、「かつは」あるいは「ものから」という並立・逆接の文脈において生じるものであり、「をこがまし」という思いを呼び起こす自分の現状そのものに対する評価は保留されたままであるのみならず、状況を打開する具体的な行動を貫徹する原動力ともなり得ないという点で、夕霧とも異なるものであった。

以上、『源氏物語』における「をこがまし」という表現を辿って見てきたが、薫の「をこがまし」は、柏木や夕霧のそれを一面では継承しているといえそうだが、しかしそれにも増して、柏木とも夕霧とも異なる薫独自の恋のありようを示していたことが分かる。光源氏が、「をこがまし」という意識と自制・反省とが結びつくという心の動きを見せている点で、独自の位置に立っていることは、もはやいうまでもないだろう。

四

以上、『源氏物語』における「をこがまし」という意識の分析を通して、それぞれの男君の恋のありようを考察してきたが、ここで寢覚の帝の「をこがまし」に立ち戻り、その〈系譜〉上の位置づけを図りたい。

寢覚の帝の「をこがまし」という思いは、寢覚の上に迫っていない

がらついに逃がしてしまったことに由来しており、また、再三の文にも一行の返事すら無いのに、期待をかけていたとはお笑い種であったという思いなのであり、かつ、帝ともあろう自分がたつた一人の、しかも皇族の血をひくとはいへ臣下である太政大臣の女、故関白の未亡人に執着し翻弄されているという意識に基づいているのであった。そして帝は、「をこがまし」と幾度も思いつつも寢覚の上を諦めることができず、文を贈り続ける。「をこがまし」という意識が、行動の抑制に結びつかず、かといってその意識を振り切ることができない。このような帝の心的傾向は、まさしく『源氏物語』の薫に依拠しているのである。それは、帝の例⑪に見たような思考の屈折に、最も端的に表れているといえよう。

寢覚の帝の「をこがまし」という思いは、女を手にし得ぬが故の「をこがまし」さであり、また自分の心をおさめることがないという点で、光源氏的な心情ではあり得ない。女を手にし得ないという点とだけを見れば夕霧と似ているようだが、では帝の「をこがまし」の原点は夕霧なのかといえ、それも当たらない。『夜の寢覚』の帝は、他ならぬ『源氏物語』の薫の「をこがまし」という心的傾向を継承する人物として特徴づけられていることが、物語表現から確認されるのである。

本稿では「をこがまし」という表現に着目し、『夜の寢覚』の帝の人物造型の〈系譜〉上の位置づけを試みた。しかし、無論この方法だけで、寢覚の帝の造型方法の全てを明らかにし得たというわけではない。寢覚の帝と、『源氏物語』の「をこがまし」の〈系譜〉を形成する男君達との関連は、「をこがまし」だけではないし、帝の人物

造型の方法は、蕉のただの模倣ではないのである。そもそも、帝の「をこがまし」という意識は、いわゆる〈帝闖入〉によって引き起こされたものなのだと、いうことを確認しておこう。〈闖入〉場面における帝の思考と行動の物語表現——ここに、『夜の寝覚』の帝という人物の造型の方法を解き明かす、もう一つの鍵がある。

注

- (1) 『夜の寝覚』本文は、『校本夜の寝覚』（高村元繼編、昭和六十一年・十、明治書院）の島原本の翻刻に拠り、適宜仮名遣いを改め漢字を当て句読点を施し、必要と認めた箇所は私に校訂したものをを用いる。なお、島原本本文については、影印校注古典叢書『夜の寝覚（二・五）』（大槻修・大槻節子、新典社、昭和五十一年・五十八）をあわせて参照した。
- (2) 『続寝覚物語の研究』（平成二・九、笠間書院）一九一頁。（「寝覚物語の帝——中の君の主人公性との関わり——」、平成元・三初出）
- (3) （朱雀院、大皇の宮ニ対シテ）「内大臣トテ、マサカ女一宮ヲをこがまし、さりとて、よにおろかには思ひきこえじ。任せ御覽ぜよ」（巻五・五八九）
- (4) ・（大皇ノ宮ニ対シ）「…もの狂をしき狐などが、名のりをしかつらけ「意味不明」申し出でむことを、まこととしたまふ、いと不便に、人聞き思ふらむことも、返りてをこがましきことに

候ふ」と申したまふを

（巻四・四二三〜四二四）
・（寝覚ノ上ニ対シ）「宮（一宮）の御心地の程、ありしことども聞くことに、をこがましくも妬くもおぼえしかど…」

（巻五・五〇〇）
この他、内大臣の対目的な「をこがまし」二例については、本稿では考察の対象としない。

- (5) 「平安文学語意考証（其一）」——をこがまし・さるは・ものは——（「平安文学研究」十七輯、昭和三十・五。なおこの他、「をこがまし」と「をこ」について考察したものに、保科恵氏「類義語彙語義考証稿——「をこ」と「をこがまし」と——」（『解釈』第四〇巻第三号、平成六・三）がある。

注5の石川氏論文に同じ。

- (6) 『源氏物語』本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語（一・六）』（小学館）によるが、一部私に改めた箇所がある。以下も同様である。

(7) 国会図書館蔵本のみ「おもふけ」。従来、「思ふ気」（「気」＝「気持」）説、「思ふ気」の誤写説、訓点語系の「おもぶき」（「おもむき」に同じ）説、「おもむき」の誤写説などがあるが、決定したい。『日本古典文学大系』（岩波書店）は、

『校註』『全釈』ともに、「思ふ気強く侍りける人」と読んでいる。『全釈』は、「上野本（※国会図書館蔵本）のようになんて思ふけがいいかと思う」と言い、「こうと思いいんだ点では気の強い人ですね」と通釈しているが、し

かし「氣」を氣持・意志の意に用いた例があるかどうかは問題だと自ら疑っている。これはやはり「おもぶき強き」と読むべきで、「おもぶき」は「おもむき」に同じく、「心の向かうところ」「意向」の意味であり、「おもぶきが強い」とは、「ひたおもむき」であること、つまり、一徹であることをいう。

(補注一三一、四四三)

(9) 「これに懲りたまふとて、内などに居ること難くなりたまひたらば、ただ今年のうちにこの位をも捨て、八重立つ山の中を分けても、必ず思ふ本意かなひてなむやむべき。…」

(巻三、三二五)

(10) 永井和子氏はこの場面について、次のように述べている。

こうした中宮に甘えて、帝は苦しみのあまりすべてをありのままに打ち明ける。中の君の類稀な美貌を語り、その人を妻とする主人公の宿運のめださを言うが、「…と、のたまはする御ものうらやみの、童げたるを、をこがましく見たてまつらせたまふ。」とあって帝は形なしである。即ち座標軸としての中宮に照らせば、帝はまさに「をこがましき」状況に在るに他ならない。恋に一途にのめり込む「をこ」なる帝を、仮に「色ごのみ」と位置付けておきたい。

(『続寝覚物語の研究』一九三頁。注2に同じ)

永井氏はここで、「をこがましき状況に在る」帝を、直ちに「をこ」なる帝とみなしているが、両者を即座に等価のものと見ることはできないことは、石川徹氏の整理(注5)からも明らか

(11) である。また、永井氏はその根拠を中宮一人に求めているが、中宮が帝に対して「をこがまし」という思いを抱いている場面状況を見ると、中宮はあくまで、帝の「御ものうらやみの、童げたる」様子を「をこがまし」と思っているのが、寝覚の上に執着する帝の陥っている状況そのものが「をこがましき」状況であると、中宮を通して判断することはできないのである。すなわち、「をこがまし」という意識そのものがただちに「をこ」であることを示すのでは決してないのであって、帝が「をこ」であるか否かの判断根拠は別の所に求められねばならない。夕霧においては「をこがまし」とともに「痴れがまし」も重要な言葉であり、彼の心的傾向を特徴づけているが、「をこがまし」に注目するのが目的であったため、本稿では考察の対象としなかった。

(たかはし まさえ・北大大学院博士課程)